ソナゾイド Sonazoid

ソナゾイド 造影超音波検査の 進歩

第2回ソナゾイド研究会 報告集

「Sonazoid (ソナゾイド)」が市販されたのは2007年1月であり、今回の「第2回ソナゾイド研究会」の時点で1年半が経過した。この間1100を超える施設でソナゾイドが採用され、肝腫瘍の診断に広く使われるようになった。造影検査を受ける患者さんが増加するにつれ、ソナゾイドを使った造影診断の臨床的な有効性に加え、その高い安全性が明らかとなりつつある。現在の使用頻度は年間10万件の検査件数になるが、現在までに因果関係が示唆される重篤な有害事象は1例も報告されていない。非重篤な有害事象もすべて軽症であり、その頻度もきわめて少ない。

この安全性が高いということと、肝腫瘍の検出能や鑑別診断能がCTに比べて高いということが広く知られるようになり、小病院や診療所の医師がソナゾイドを使った超音波造影診断に強い関心を寄せている。CTに比べ投資額が少なく、安全性が高く、かつ医師や技師の技量によって高い診断能が得られるということが、臨床医家にとって大きな魅力となっている。

肝腫瘍の検出や鑑別診断を行うのに適したソナゾイドの使用法や、得られた造影画像を診断するための診断基準が次第に明らかとなってきた。また、機器の性能向上も図られつつあり、各社とも造影モードの

バージョンが進んできている。

今回第2回目を迎えるソナゾイド研究会では、昨2007年の第1回における発表に比べると、その画質の飛躍的な向上が明らかである。高画質の造影像は診断の確信度を高め、臨床的な有用性を高める。これは、超音波装置の造影性能が向上したことと同時に、医師や技師の造影技術が向上したことによると考えられる。

同時に、使用の目的も広がりつつある。肝腫瘍の検出・鑑別診断および肝がん局所治療の効果の評価、さらには穿刺ガイドに使われる治療支援が従来報告されている有効性である。それに加えて、造影3D・造影4Dや、術中造影超音波など、画像診断としてさらなる展開を見せつつある。造影CT、MRIに比べて、空間分解能・時間分解能が高い超音波の特徴が、造影超音波検査に生かされてきたと言える。

今回の第2回ソナゾイド研究会の発表と議論を通じて、造影超音波のさらなる広がりや発展を期待したい。

森安 史典

ソナゾイド研究会代表世話人
東京医科大学消化器内科教授